こくさいきょうしつ
国際教室だより

No. 3
2021年9月22日
国際教室担当

＜特別な教材について＞

国際教室で中心に行っている学習は、教室での学習と基本的に同じです。しかしどの教科の学習も、習得するには言葉が必要です。教科書に書いてある言葉がわからないのに、教科書の内容を理解させようとするのは無理なことです。

そこで国際教室では、可能なかぎり簡単な言葉に置き換えながら、その時間の学習内容を身に付けることを目指します。今回は、国語の教科書文章をわかりやすく書き直した「リライト教材」の一部を紹介します。（引用元：ふくろう出版「リライト教材」）

「リライト教材」は子どもの日本語力に合わせて、大きく３段階に分かれます（レベル0、レベル1、レベル2）。まずは教科書の本文からです。（4年生「ごんぎつね」光村図書下）

＜本文＞

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの中山という所に、小さなおしろがあって、中山さまというおとのさまがおられたそうです。

その中山から少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。

畑へ入っていもをほり散らかしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていったり、いろんなことをしました。

本文では、村の様子やごんの暮らし方、いたずらぶりが豊かに書かれています。しかし、日本語支援の必要な子どもたちにとっては、これでもかなりの文章量です。そこで「リライト教材」のレベル2です。【普段の会話がほぼ問題なくできる子ども】向けです。

＜リライト：レベル2＞

これは、むかしの　お話です。
村から　はなれた山の中に　きつねが　住んでいました。
名前は、「ごん」です。
ごんは、ひとりぼっちの　小ぎつねです。
ごんは、森の中に　あなを　ほって　住んでいました。
夜も　昼も　村へ行って、いたずらを　しました。
畑の　いもを　ほったり、葉っぱに　火を　つけたり、とうがらしを　とったり　しました。

説明の簡単な言葉、その学年でよく使われる漢字をつかって、一文一語を短くしています。しかし、「だれが?」が、一文の中に必ずしもなく、「～たり、～たり、」と「やったこと」が続き、話がこんがらがってしまいそうです。そこでレベル１です。【知っている言葉ならば使って話せる子ども】向けです。

＜リライト：レベル１＞
これは、むかしの　お話です。
山に、きつねが　いました。
名前は、「ごん」です。
ごんは、ひとりぼっちでした。
ごんは、あなの中に　すんでいました。
ごんは、夜も　昼も　村へ　行きました。
ごんは、いたずらばかり　しました。

より簡単な言葉に換えて、すべて「だれが、〇〇した。」の一文にまとめています。しかし、日本に来たばかりの子などは、ひらがなの読み書きだけでもたいへんです。そこでレベル０です。【ひらがなの読み書きができる子ども】向けです。

＜リライト：レベル０＞
むかし、やまに、きつねが　いました。
なまえは、「ごん」です。
ごんは、ひとりぼっちでした。
ごんは、よるも　ひるも　いたずらを　しました。

じつに簡単な文章になりました。話のおおまかな内容を捉えるには、この「レベル０」で大丈夫です。しかし、ここまで短いと、物語の雰囲気や場面の様子が想像しにくいです。そこで必要となるのが挿絵です。挿絵は、作品の一部です。その場面に合ったその場面を補う挿絵が使われており、教科書は本当によく考えられています。挿絵を見せながら、子どもの日本語力に合わせた「リライト教材」を繰り返し読むことで、言葉の習得だけでなく、国語の学習に興味をもってもらいたいと考えています。

帷子小学校では、国際教室での学びを全校の子どもたちにも伝え、一人ひとりのよさやがんばりを互いに認め合う環境づくりをしていきます。国際教室の取組についてご理解・ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。